

1. 縮小社会とは
  2. 労働観の変遷
  3. 労働の定義づけ
  4. 考察 「縮小社会」と労働
  5. 参考文献
- 

## 1. 縮小社会とは

産業革命から今日に至るまで、人類は石油、石炭、天然ガス、ウラン等の資源を用いて一貫して「発展」を続けてきた。しかしながら現代において、様々な点で「発展」の歪みが生じている。技術の発展は水質汚染や大気汚染をもたらし、大量生産・大量消費体制は限りある資源の浪費と膨大なゴミの産出に繋がった。世界各地で貧富の格差は拡大し、地球規模で見れば食糧が余りある状況であるにもかかわらず、多くの人が飢餓に苦しんでいる。これからも人類が生き続けていくことを考えれば、従来の「発展」概念を見直す作業は避けられない。こういった状況のなかで主張されている概念が「縮小社会」である。

### 縮小社会の4大原則 (中西[2014], pp.153-157)

#### ① 持続可能で豊かな縮小社会

膨れ上がった経済や科学技術を取捨選択し、持続可能性の観点から真に有用なものを生かしながら無駄を切り落として、真に豊かな生活を目指す。

#### ② 弱肉強食のない人間尊重社会

格差を無くし人間の尊厳が守られる社会にするには、社会のシステムそのものを作り替えなければならない。住居、育児、雇用、教育、医療等の面で、「国家責任としての福祉主義」を促していくことが重要である。

#### ③ 自由闊達な社会連帯のコミュニティ

もともと日本は自然豊かで四季折々の風景を愛で、争わないで仲良く暮らす和の気質をもち、助け合いや相互扶助のコミュニティも維持、発達させてきた。縮小社会では、こうした人生の喜びを分かち合えるコミュニティを社会の中心に据える。

#### ④ 自然との共生・循環社会

江戸時代の日本は、人口約3000万人で、全体的には欲を抑えた定常社会・循環社会だと考えられている。縮小社会を考えると、江戸時代に戻るわけではないが、当時の生活には参考にすべき点が多い。

## 2. 労働観<sup>1</sup>の変遷 (今村 [1998], pp.1-66, 157-192)

労働観とは、労働の当事者である人々が自分の労働をどのように感じつつ生きているのか、あるいは自分の労働を、そして労働の相手である自然を、どのように解釈しつつ生きているかという問いに対する回答である。生産活動のような物質的行動は異なり、主観的な観念である労働観は、どのようにすれば描けるのだろうか。「人々の語る言葉に頼るしかない<sup>2</sup>」(ibid., p.16)のだろうか。

### 2-1. 近代以前：古代ギリシア

- ・ 職人作業(手作業)は自由人が行うべきでないもの。
- ・ 商業活動は欲望を際限なく増幅させるため、最も汚くて恥ずべき仕事。
- ・ 労働が独自の人間的活動であるとか、労働が社会にとって大いなる社会的機能を発揮するといった観念は存在しない。

### 2-2. 近代以前：ニューブリテン島<sup>3</sup> マエンゲの人々

- ・ 「仕事の審美的成就」と「仕事の慎重な運び」が、評価基準となる。村人たちは、隣人の畑の作り方を見て、互いを評価し、仕事の質の優劣を決める。「美しく」仕事ができる人は「良い人」だとされ、下手な人は「悪い人」と言われる。一年の終わりには、儀礼的な大祭が行われるが、それは自分の仕事の「美しさ」を客人である隣人に評価してもらうための場になる。
- ・ 「労働」とは、宗教的な祈りであり美的活動である。生業に割かれる時間は少なく、多くの時間を使って「審美基準」の討議を楽しんでいる。自由時間こそが評価され、多忙であることが評価されることはあり得なかった。

### 2-3. 近代：19世紀西欧

- ・ 資本主義の浸透に伴い、商品生産と貨幣財産が社会的利害関心の中心となる(= 手仕事の重要性が増す)。労働は組織化され、貧困<sup>4</sup>が悪いものであると考えられるようになった。

---

<sup>1</sup> 労働の当事者である人々が自分の労働をどのように感じつつ生きているのか、あるいは自分の労働を、そして労働の相手である自然を、どのように解釈しつつ生きているかという問い(今村 [1998] pp.16-17)は、外部からどれほど精緻に分析を行ったとしても「理解」することはできず、労働者自身の「語り」から探るしかない(ibid., p.69)。

<sup>2</sup> 「労働」の意味するもの自体を共有することができないため、彼らが用いている言語表現から類推する。例えば、主産業(焼畑農業)に関連する言葉と副産業(漁業)に関連する言葉を比較した場合、よりプラスな価値を表現したいときに転用されるのは前者の言葉である。彼らがどのような「労働」を評価するのかを外部者が認識するためには、彼らの経験から醸成された言語表象に注目しなければならない(ibid., pp.18-19)。

<sup>3</sup> 南太平洋のメラネシアに属する、ビスマルク諸島の最大の島。マエンゲの社会に関しては、日本語文献に限っても多くの蓄積がある。

- ・ フランス革命以降、労働は人間であることにとって本質的なものであるという考えが定着していく。しかしながらそれは、労働を賞賛することで民衆を労働に献身させる「作られた神話」に過ぎなかった。→労働の神聖化
- ・ 労働は否定的なものから肯定的なものへ移行し、それに伴い、余暇と無為は怠惰を意味するようになる。初期近代は、無為を怠惰なものとするために、国家とブルジョワが共闘する時代であった。人生の意味が労働の喜びに求められるようになり、「労働の喜び」をいかに達成するかが議論された。
- ・ 次第に分業化が進み、労働の自律性が薄れていく。労働者の自己意識は自分を評価してほしい、周りに賞賛されたいという欲望で溢れる。労働の目的は「喜び」や「生きる意味」から、褒められたいという「虚栄心」に取って代わる。

### 3. 労働の定義づけ（濱本 [2011] pp.15-20, 49-80）

日本国憲法第 27 条 1 項には、「すべて国民は、勤労の権利を有し、義務を負う。」と記されている。憲法に促されるまでもなく、人々は当たり前のように職を探し仕事をする。そして、少なくない人々が不法な長期労働や低賃金に苦しんでいる。低成長のなかで尊厳のある生き方を模索する「縮小社会」を考えるうえで、労働というものについて考え直す作業が必要になる。今日の私たちにとって、労働とは何を意味するのだろうか。そして、これからの「縮小社会」で、労働はどのように考えられるべきなのだろうか。

①「過小な定義」：資本主義の論理に基づく生産関係に還元された経済活動、あるいは資源を用いた生産手段と生産対象・分業と交換を伴い生存に必要な物資やサービスを他律的に充足させる営み<sup>6</sup>

②「過剰な定義」：「生そのもの」が労働である<sup>7</sup>。

このような労働の二面性は、一つの概念として捉えきれないものである。前者のみを取り上げれば過少な定義に留まり、かといって両方の側面を統合させようとする、

---

<sup>4</sup> 17 世紀前半までは、貧困が長らく宗教的価値を有していた。貧しいことは魂を救う機会であり、豊かな人は貧しい人に施しを行うことで救霊の機会を得ることができる。そこでは「贈与経済」のドラマが展開され、可能な限り相互扶助が理念として追及されていた( *ibid.*, p.44)。

<sup>5</sup> アンリ・ドマンの労働本質論では、労働者に不利な社会的状態を改革できるなら、労働に内在する喜びは自然に湧き出てくるという主張がなされている( *ibid.*, p.72)。

<sup>6</sup> この考え方の前提には、アダム・スミスが示した労働の二面性、すなわち「生き甲斐的な人間行動」と「避けるべき苦痛」がある(濱本 [2011 p.15])。

<sup>7</sup> 資本主義の価値基準に基づく近代的労働、すなわち生産性のみが問われる労働に対抗するところから出発している。近代的労働によって搾取されてきた「女性」、近代的労働の場から排除されてきた「障害者」をプロレタリアートとして承認させようとする一連の運動で展開された( *ibid.*, pp.18-19)。

それは過剰な定義へと転ずる。このような倒錯を成り立たせていたのは、理論的正当性というよりはむしろ政治的構造物である。(ibid., p.49-50)。

近代は伝統をすっかり転倒させた。すなわち、近代は、活動と観照の伝統的順位ばかりか、<活動的生活>の内部の伝統的ヒエラルキーさえ転倒させ、あらゆる価値の源泉として労働を賛美し、かつては<理性的動物>が占めていた地位に<労働する動物>を引き上げたのである。しかし、このような近代も<労働する動物>と<工作人>、すなわち「わが肉体の労働」とわが手の仕事をはっきりと区別する理論を一つも生み出さなかった。これは、一見したところ、驚くべきことである(Arendt [1958] p.139)。

#### 4. 考察 「縮小社会」と労働

本報告では、「縮小社会」という概念から労働そのものを問い直すことにより、それが意味するものが時代を通していかに変質していったかを概観した。かつて評価されるはずのなかった労働が、今日では、少なくとも日本ではプラスの評価をされていることに疑いの余地は無いただろう。しかしながら、今回取り上げた著書が主張しているように、もしそのような労働観が、資本主義が形成される過程で行われた実業家と国家によるプロジェクトの産物なのだとしたら、「縮小社会」の概念はこの近代が生み出した労働賛美のドグマ<sup>8</sup>から抜け出そうとするものに他ならない。では、「縮小社会」の実現というものを考えてみたとき、議論されるべきものは何だろうか。

思うに、「縮小社会」という題材で行われている議論には二つの性格があるように思われる。一つ目はプロジェクトとしての「縮小社会」、二つ目は個人の思想としての「縮小社会」である。「縮小社会」とは、人間が長く生きられる社会を指すのか、あるいは人間が「よく生きる」ことができる社会を指すのか。これらは常に両立するとは限らず、絵空事として現実のポリティックスに軽くあしらわれる危険性をはらんでいる。「縮小社会」をプロジェクトとして達成することを考えたら、市町村や県、国といった行政主体を取り込むことは避けられない。そういった場合に、いかに平和的に彼らのポリティックスに入り込むかが議論されなければならないだろう。一方で、個人の思想として「縮小社会」を実行する分にはそうしたことは考慮する必要はない。しかしながら、現実に行進している地球規模のダイナミズムに関わるには余りにも微力である。

---

<sup>8</sup>ギリシア語では元来公的機関の政治的決定もしくは命令を意味し、さらに哲学上の諸学派の学説をもさした。教義、教説などと訳され、固定された堅固な信条をいう。したがってときには柔軟性を欠く無批判な信念という侮蔑の意味でいわれる。

#### 参考文献

今村仁司 [1998] 『近代の労働観』 岩波書店。

ドーア, ロナルド [2005] 『働くということ -グローバル化と労働の新しい意味-』 (石塚雅彦訳) 中央公論新社 (原書: Ronald P. Dore, *New forms and meanings of work in an increasing globalized world*, International Labour Organization, 2004)。

中西香 [2014] 『衰退する現代社会の危機 縮小社会への現実的な方策を探る』 日刊工業新社。

濱本真男 [2011] 『「労働」の哲学 人を労働させる権力について』 河出書房新社。

松久寛 [2012] 『縮小社会への道 -原発も経済成長もいない幸福な社会を目指して-』 日刊工業新聞社。